

སྐྱེས་བུ་གསུམ་གྱི་ལམ་གྱི་རིམ་པ་ཆེ་བ་བཞུགས་སོ།།

三士菩提道次第広論

ジェ・ツォンカパ・ロサンタクパ

文殊師利大乘仏教会

Mañjuśrī Mahāyāna Buddhist Association

འཇམ་དབྱངས་ཐེག་ཆེན་ཆོས་ཚོགས།

三士菩提道次第広論

ツ
オ
ン
カ
パ
・
ロ
サ
ン
タ
ク
パ

ナ
モ
ー
グ
ル

マ
ン
ジ
ユ
ゴ
ー
シ
ヤ
ー
ヤ

御身は千万の妙徳と至善より誕生されている
御勅は無辺衆生の希みのすべてを叶えるだろう
御意はすべての所知をすべて如実に観ている
君よ 釈迦族の主 私はあなたを礼拝する

無比なる釈師たる彼の最勝なる王子
勝者の一切業の責務を負い給う
無数の国土へと化現し戯れ給う
弥勒・文殊の両菩薩 私は礼拝する

思議することすら甚だ難き仏母
その密意を如実に解し給う閻浮の莊嚴
龍樹 無着とこの三地に名高き
この方々を私は礼拝し奉る

二人の大馬車より善く相承する
甚深見と広大行とのこの道統
過ることもなく円満する枢要
教誡の宝蔵たる燃燈の君に傳かん

一切円満の教説を観る眼となる
賢劫を解脱へと引導す最勝の門
慈みに満ち善巧方便を行ぜられ
明示せる善知識たちに敬礼せん

昨今瑜伽行に励む者たちは聞法に乏しい
多くを聞ける者たちは実践に通じてない
多くは教説の一部にしか眼を向けず
教義を正理で分析する力をもたない故

教説の枢要を究竟した最勝なる教説に
通ずる者を喜ばす道を離れていると思われる
しかるに大馬車たちのこの道を積すことに
私の思いのすべてが奮い立つように

派閥意識の闇に覆われてない者よ
善悪を分別する心の力を持つ者よ
賢き有暇の所依を活用したい者よ
賢劫の者たちよ 一心に聞き給え

これは勝者の一切の教説の枢要を集約したものであり、大馬車たる龍樹・無著の兩人が開かれた道統でもある。これは一切相智の地へと赴かせる勝れた人の宗義であり、三士が修行する次第のそのすべてを余すことなくすべて集約したものである。菩提道次第は賢劫者を仏地へと引導するための次第である。ここに説くものはこの法である。

吉祥ナランダー僧院の賢者たちは、仏法を講じるにあたり、阿闍梨の語清浄・弟子の心相続清浄・所説法の清浄という三清浄を通じてなされていた。これに対して後代のビクラマシーラ僧院では仏法興隆のために学者たちが重視したものは、法を著した者の偉大性・その法自体の偉大性・それがどのように説かれて聴聞されたのか、という周知の二つの伝統がある。本書では後者〔の流儀〕に則って説明したい。

これに従い菩提道次第を引導するために四ある。法の出自たる著者に対して畏敬させるために著者の偉大性を説く、教誠に恭敬させるため法の偉大性を示す、二つの偉大性を具える法に対する聞法・説法の次第、教誠本体たる弟子の指導法。

甲初 著者の偉大性

この教誠は、一般には至尊弥勒法主の『現觀莊嚴論』の教誠であるが、特にここで典籍としては『菩提道灯論』でもあることから、その著者が本著者でもある。

彼は阿闍梨「ディーパンカラ・シュリージュニヤーナ」別名「バルデン・アティシヤ」として周

知され、この方の偉大性には三ある。円満なる種族に降誕なされた様子、その所依で如何に功德を具足されたか、具足なさり教法に貢献されたのか。

乙初 円満なる種族に降誕なされた様子

〔ナクツオ〕 ロツアーワの『八十札讃』に、

東方のサホール国に大きな都市があつた

そこはビクラマニブーラと名付けられていた

この街の中心には王の宮殿がある

広大で「金幢宮」と呼ばれている

王朝の経済力や支配力は唐帝にも並ぶものであり

その地の王はカルヤナシュリーという方である

その王妃はシュリープラバーという方である

この二人には三人の皇子がおられた

パドマガルバ チャンドラガルバ シュリーガルバという名である

パドマガルバ王子には五人の妃がおり九人の子がいた

長男はプニヤシュリーと呼ばれる人であり

彼は当代の大学者 別名ダーナシュリーと名高い

末子シュリーガルバは比丘ビールヤチャンドラである

次男チャンドラガルバ これがこの至尊大師なのであつた

と説かれる通りである。

乙二 その依処で如何に功德を得ておられたのか

如何に功德を得ておられたのか、ということには二つある。多くを理解される聖言の功德を得ておられた（丙初）・正しく成就した証解の功德を得ていたこと（丙二）。

丙初 聖言の功德を得ておられた様子

どのように如何に聖言の功德を得たのか、ということは『礼讃』で

御歳二十一にしてすでに

六十四の芸術と工芸のすべて

梵語文法と一切の量に通曉されていた

と説かれる通りである。

御歳二十一歳までに、外道・仏教の両者に共通する声明・因明・工巧明・医明の四明処を修得され勝れたお方とられた。なかでも特に御歳十五の時には『正理滴』を一度聴聞されただけで、外道の有名な論理学者と問答をして彼を論破され、このことによってこの名は周知されるものとなった、大ドルンパは伝えている。その後〔王舎城の〕黒山寺院の瑜伽自在者たる呼金剛の御尊顔を拝し、金剛空行母の授記を得て、師ラーフラグプタからすべての灌頂を授かって密名を「ジュニャーナグフヤヴァジュラ」と拝名した。二十九歳の時には、多くの悉地を得ていた者に師事して金剛乗を学び、聖

典と口伝のそのすべてに通じたので、かなり密教に精通したと自負されたが、荼枳尼天たちが、過去に誰の眼にも触れたことのない多くのタントラの経帙を夢で開示したので、慢心は癒えたのである。

その後、グルや本尊により、直接もしくは夢において「もしおまえが出家するのならば、教説と多くの衆生たちを廣大に利益することができるだろう」と勧めたので、大衆部の羅漢、大持律者シーララクシタと呼ばれる、加行道の実義に一部に入定していた方を戒師として出家することとなった。戒名を「シュリー・ディーパンカラジュニャーニャ」と拝命された。

それ以降三十一歳までに、上下の顕教乗の内明蔵を学ばれた。特に『阿毘達磨大毘婆沙論』をダルマラクシタ大師の御前において、オタンタプーリの地で、十二年聴聞された。根本四部の聖典に通じたので、各部派で異同のあるそれ以外の部派のものたちの供物の受渡法等といった細い取捨すべき項目であつてもそれを混乱することもなく理解されたのである。同様に、大海の如き自派・他派の学説の彼岸へと到達され、聖言教の一切の要点を不顛倒に解しておられたのである。

丙二 証解の功徳を得ていたこと

どのような証解の功徳を得ておられたのか。概して勝者の聖言の教示のそのすべては（経・律・論の）三宝蔵に帰するものであり、証解の教示も（戒・定・慧の）三学処に帰している。このうち戒学処こそが、定・慧等といったすべての功徳のなかの所依であるものとして、仏説とその註釈では繰り返し返し讃嘆される。しかるに先ずは戒学処に関する証解の功徳を具えていなくてはならない。これにはまた三つある。第一に最勝なる別解脱律儀をどのように具足していたのかといえればこれは『礼讃』で、

君は声聞乗へと入門し給われ

戒律をヤクの尾のように守られた

君は吉祥な梵行の最勝比丘

上座の大持律者の君を私は礼拝する

と説かれている通り、この師は具足戒を授かり、それを身命不惜に遵守された。それはちょうど自分の尻尾の毛なみに執着しているヤクが何かの拍子に尻尾の毛を何かに引っ掛けて、たとえ獵師がやってきて生命を奪おうとしても、大切な毛が一本ずつが切れることないように守ろうとするか如くであった。授戒し宣誓し、約束した大条目学処の規則はもちろん、細目の学処の規則にいたるまで、身命不惜に遵守されていた。このことから「上座の大持律者」であったと讃嘆されるのである。

菩薩戒をどのように具足されていたのかは『礼讃』で、

君は波羅蜜門へと入り給われ

殊勝な決意を清浄とされた

その菩提心は衆生を決して見捨てない

智慧と悲とを持たれた貴方を私は礼拝する

と説かれている通り、慈悲を基とする菩提心を修習するための多くの教誡、特にスヴァルナドヴィーパに師事し、至尊弥勒と文殊からアサンガ、シャーンティデーヴァへと相承した最勝教誡を長期間にわたって修習されていた。これは『礼讃』で、

自利を捨てて利他に励んでいる

このようなお方が私の師なのである

と説かれている通りである。自己よりも他者を愛する菩提心へと発心され、願心をもって、行心たる広大な菩薩行を学ばれる約束をし、それに準じた学処を修習されるという賢き御修行をされることで、諸々の勝子が定めていた遮罪を違反することもなく過ごされた。

それでは、どのように金剛乗の律儀を具足されていたかといえば、これは『礼讃』で

君は金剛乗へと入られて

自ら本尊を觀じ金剛心を持たれた

瑜伽自在者アヴァドゥーティーバ

秘密禁取者たるこの方を礼拝する

と説かれている通りである。自らの身体を本尊として觀じる生起次第、金剛心の究竟次第、この二つの禪定によって、瑜伽行者と呼ばれる主要な方であったと一般にも讃嘆され、特に遮罪すら違反せず、三摩耶を正しく護持されていた。これは『礼讃』で、

正念と正知をもつことで

非戒に心なさることもなく

不放逸にして念は不動にして

墮罪の過失を君は羽織ることすらない

と説かれる通りである。

このように、三種の律儀という戒学処を承諾され、単に勢いに留まることもなく、承諾事項を承諾通り護持し、遮罪の限度を逸脱しないままで過ごしておられた。もし僅かばかりでも違反があつた場合には、その都度、即時復戒させる儀軌によって清浄に護持されていた。こうした御行状は、教説の要点を理解しようとする賢者は歎ぶべき行状であると知らなければならない。秀れた人々はこれを追隨して学ぶ必要がある。

定学処に關しての証解功德がどのように具足されていたのか、と云えば、それには共・不共の二種類があるが、共〔定学処〕としては奢摩他の心可動性を得ておられた。不共定学処は、極堅の生起次第を行持され、持明戒禁取行を六年か三年の間行じ、この期間中にウツディヤーナにおいて、荼枳尼天が歌うのを聴聞され、それを暗唱なされた。

慧学処の行持に關しては、共〔慧学処〕としては止観雙運の毘婆舍那の定を獲得され、不共〔慧学処〕としては究竟次第の殊勝禪定を得ておられたのである。これは『礼讃』で

秘密真言乘の聖典の通りに

加行道者たられたことは明らかである

と説かれている通りなのである。

乙三 功德を具足なさり教説に対する所行をなされた次第

教説への業績が如何なるものであったのか、ということについては、インドにおける御業績とチベットにおける御業績との二つがある。

丙初 インドにおける業績

金剛座の大菩提寺で、悪しき外道の論者たちを三度、仏法で論破され、仏説を護持された。上下の自派の教説に対する無理解や誤解、猜疑心などといった悪しき垢を取り除かれたのであり、そのことで教説を興隆なされた。このことによって、彼はすべての部派のひとびとから、部派を問わず、宝冠の莊嚴とされる者となった。このことについては『礼讃』で

大菩提宮殿において

すべてのものは集会した時

自派と他派との悪しき学説の

すべてのその論争を獅子吼により

圧倒して駆逐なされたのである

と説かれ、また、

オダンプーリの地にては

二百五十人の比丘たちと

ビクラマシーラの地にては

百名にも達する比丘たちと

根本四部派のすべてが在籍していた

しかし君が部派意識を持ち給うことはなかった

マガダ国の地においては

そのすべての地域の

釈尊の四種の眷属の釈教師の

すべての人の宝冠の莊嚴となられていた

君は十八部派のそのすべてを

統合する者として君臨され給い

すべてのものは口伝を授かった

と説かれる通りなのである。

丙二 チベットにおける業績

大師王たる師弟は、訳経師ギャ・ツォンドゥー・センゲ、ナクツォ・ツルティム・ギャルワの二人を順次インドへ派遣した。様々に大きな困難を経たが、チベットへとお越し下さるよう招聘した。それがチャンチュプウーの世で漸く実現することとなり、ガリー地方の上へとお越しくださった。その時に仏教の改革をしていたいただきたいとお願いすると、顕密のすべての枢要を集約し、実践の次第として編まれたこの聖典『菩提道灯論』を著作なされり、これによって教説を興隆されたのである。

その後、ガリーに三年、ニュタンに九年、ウー・ツァン各地に五年、と滞在され、賢劫者たちに、顕密のテキストとそれに関する教説のすべてを教示なされた。減びていた教説の伝統は復興し、若干

残っていたものを再興することとなり、誤解の垢はよく取り除かれ、教室の塵を払われた。

概して、このヒマラヤ地域の仏教は、前伝期に吉祥シャーンタラクシタ、パドマサンバヴァによってその教灯が開かれたものである。しかしその後、空性の証解について様々な解釈が出現したことで、方便分を損減してしまい、すべての作意を否定してしまう、支那の和尚によって仏教に影が差した。これを阿闍梨カマラシーラは善く否定なさり、勝者の密意が確定され、それは恩深いご業績である。後伝期には、タントラ部の意味について誤解してしまっている者、自分自身は、パンディットである、行者である、と慢心した者たちが出現するようになった。彼らは仏教の根本たる梵行を大きく損なっていたが、この偉大なる御方が、これを正しく否定され、誤解を改めて、教説を不顛倒に興隆なされた。そのことによってチベット全域が彼の恩恵を預かることになったのである。

こうした牟尼の密意を解釈する聖典を著作するためには三つの円満な条件が必要である。すなわちそれは、所知である五明処に通曉していること、それらの意味を実践するための枢要たる教誡、すなわち正等覺以降の勝れた人々によって間断なく相承されている口伝を保有していること、また本尊の尊顔を拝し直接許可を得ていること、である。これらのいずれかがあるだけで聖典を著述してもよいが、三つの条件のすべてを具足していれば円満であり、この大阿闍梨は三条件すべて具えておられた。特に本尊による許可について『礼讃』では、

吉祥呼金剛 立三昧耶勇猛王 觀世自在 仏母多羅

尊顔を拝し許可を得て 夢の中にいたるまで

甚深・広大の正法を 常に聴聞なされていた

と説かれている。

師資相承の法脈には共乗・大乘の二つの法脈があるが、後者には波羅蜜多乗と真言乗との二つがある。前者には、甚深見相法脈、広大行法脈の二つがある。後者には弥勒法脈と文殊法脈の二つがあり、合計で三つの法脈がある。真言乗にも五流の法脈があり、学説法脈・加持法脈・諸誡法脈など多くの法脈がある。これらの法脈を御持ちになり、直接聴聞した師としては『礼讃』に次のように説かれる。

常に師事なされたグルとしては

シャーンティパ スヴァルナドヴィーパ

バドラボーディ ジュニヤーナシュリー

悉地を得た多くの方々から あなたは相承されていた

特には龍樹より 一子直伝の相承たる

甚深と広大の教誡を 君は御持ちであられた

このように悉地を得ていた十二名のグルが居たのは周知だが、それ以外にも居らしゃった。五明処に通曉しておられた様子については先程説明した。以上のようなことからこの阿闍梨は勝者の密意を正しく確定できたのである。

このような阿闍梨であったので、このお方にはインド、カシミール、オッディヤーナ、ネパール、チベットの各地で数えきれない程の弟子が居た。

そのなかでも主要な方としてまずインドにおいては、この師と智慧が等しくする大バンディタ・ビトワ、ダルマカラマティ、マディヤシンハ、クシティガルバの四大弟子がいる。ある人はミトラ

グフヤを加えて五大弟子とする説もある。ガリーの出身者には、ロツアーワ・リンチェンサンポ、ナクツォ・ロツアーワ、大師帝チャンチュブ・ウー王がいる。ツァンの出身には、ガルゲーワ、グー・ククパ・レーツエーがいる。ロダクの出身者としては、チャクパ・ティチョク、ゲワキョンがいる。カムの出身には、ネルジョルパ・チェンポ、ゴンパワ、シェーラプ・ドルジェ、チャク・ダルトンパがいる。ウー出身には、クトン・ツォンドウー・ユンドウン、ゴク・レクペーシェーラプ、ドムドンパ・ギャルウエーチュンネーが居る。

これらの弟子たちのなかでも師自身の業績を廣大とした偉大なる後継者は、救度仏母多羅菩薩より授記を受けた方、ドムトンパ・ギャルウエーチュンネーである。

以上、著者の偉大性を完結にまとめたが、詳しくは『大行状記』を参照されたい。

甲二 教誡に畏敬させるため法の偉大性を示す 菩提道灯論の偉大性

法は、この教誡に関する聖典『菩提道灯明論』である。ジョウオは多くの聖典を著されたが、そのなかでも最も中心的なものであり、すべてのことを兼ね備えているものが『菩提道灯明論』なのである。それは顕密における枢要をまとめ教示しており、その所説はまたすべての側面から円満なものである。それは心を制するための次第を中心とするものであるから実践しやすいものであり、二人大馬車の教義に通暁していた二人の大師の教誡により莊嚴され、それ故に他の教義よりもはるかに非常にすぐれたものである。

この聖典における教説の偉大性には四有る。すべての教説が矛盾なく理解される偉大性（乙初）、すべての教説が教説として顕現する偉大性（乙二）、勝者の密意を容易に見出し得る偉大性（乙三）、大きな悪行は自ずから減するという偉大性（乙四）。

乙初 すべての教説を矛盾なく理解する偉大性

教説とは『般若灯論釈』で、

教説とは、天人の甘露の得たいと思う者たちが知るべきもの（苦諦）、断じるもの（集諦）、現証すべきもの（滅諦）、修習すべきもの（道諦）について、不転倒に説示するものであり、世尊の所説のことである。

と説かれるように、勝者の善説のそのすべてのことである。そのすべてを矛盾することなく理解することは、ここにおいては、一人の人が成仏していく道として理解することであり、あるものは、道の主たるものとなり、あるものは道の支分となるのである。

諸菩薩の目指すべき目標、それは世間の利益を実現することであり、その所化についてはまた、三種の種姓をもつすべての者たちを摂取しなくてはならない。それ故に彼らの道を学ぶべきなのである。何故ならば、『菩提心釈』では

自ら確定する如く他者に確定させるため
如何なる時も迷乱せずに正しく従事する

と説かれているからであり、『量評釈』でも

方便より起こつた因が隠れてる場合

それを解説することは至難である

と説かれており、自ら如実に確定していないのに、それを他者に説示することなど不可能だからである。三乗道を知ること、菩薩が目指す目的を実現させるための方便であることは至尊弥勒も〔『現觀莊嚴論』で〕

衆生を利益するものを道知によって世間の利益を実現なされるお方

と説かれており、仏母經典でも

諸々の菩薩は声聞道であるもの、独覺道であるもの、仏道であるもの、といったすべての道を起すために、一切の道を知らなければならない。しかも究竟してなくてはならないのであり、各道での為すべきことも成し遂げなければならない。

と説かれるので「大乘者であるので、小乗の蔵は学ぶべきものではない」という説は対立証因である。大乘道にも共道・不共道の二つがあり、前者は小乗蔵で説かれるが、だからといって、それらが捨て去るべきことに一体どうしてなろうか。しかるに、自分だけが寂樂を追及する等といった特別な

くつか以外のすべては大乗者も実践する必要があるから、菩薩たちの極めて廣大蔵で三乗すべてが廣大に説かれた理由もここにある。また正等覚仏とは、一部の過失を尽し、一部の功德を具えた者ではないのであつて、あらゆるすべての種の過失を尽くし、あらゆるすべての功德を具えられた御方のことであり、それを実現させる大乗もまた、すべての過失を減尽し、すべての功德を生起させるものであり、それ故に、他の乗の一切の種類の断・証の功德が、大乘道に含まれているのである。しかるに仏位を成就するための大乘道の一部に一切の教説が属している。何らかの過失を尽し、何らかの功德を生じさせることもない牟尼の教えなど無いからであり、その一切を実現しようとする大乗者など居ないからである。

もしも「波羅蜜多乗の大乗に入るには、小乗蔵で説明される諸々の道が必要であるが、しかしながら金剛乗に入るためには、波羅蜜多乗の諸々の道は共通のものとはならない。それらは同じではないからである。」と言うかもしれないだろう。

しかしこれは極めて正しくない。波羅蜜道の本体は、思は發菩提心であり、行は六波羅蜜を学ぶことにまとめられ、これは如何なる場合であつてもそれに依らなければならないという必要性は『金剛頂經』でも

いまのこの命をかけてでも菩提心は捨ててはならない

六波羅蜜の行 これは決して捨ててはべきではない

と説かれており、これ以外にも多くの真言の聖典で説かれている。無上瑜伽曼荼羅入門する多くの機会にも、毎回、共・不共の律儀の両方ともを授からなければならないことが説かれている。前者は菩

薩戒そのものであり、そこで授戒するものは、三聚淨戒（撰律儀戒・撰善法戒・撰衆生戒）等の菩薩所學を學ぶことを承諾しているの、發心した後に所學を學ぶ際には、承諾したその通りに學ぶこと以外に、これとは異なる別の道など波羅蜜乘に無いからであり、『金剛空行母』『サンプタ』『金剛頂經』でも

外・秘密・三乘のすべての正法を私は護持します

と阿彌陀の三摩耶を授かる場合に説かれる様に、密教の律儀を授かる時に承諾しなければならないからである。これらにおける許諾事項と禁止事項の細かな事項まで見極めて、それらが寒暖のごとくどのような場合にでも対立項であると捉えることは、極めて重要な考え方であることは明白である。

同様に、特別な許諾事項・禁止事項以外、諸々の教説は極めて対応したものである、三乗や五道のそれぞれ上位へと入ることは、下位の各々の種類の功德を備えなければならない。波羅蜜道とは、勝仏母經典（『宝德藏般若經』）で

勝者道は過去・現在・未來を問わずすべて波羅蜜でありそれ以外ではない。

と説かれる通り、仏位へ赴くための大黒柱の如きものである、捨ててはならないのである。この同じものが金剛乘でも多く説かれるので、經典・タントラの両方に共通する道であり、それ依ることと秘密真言道不共道である、灌頂・三摩耶・戒律・二次第およびそれに付随するものを補完しそれで成仏は速疾となるのであって、共道を捨て去ることは大いなる誤りである。

もしこうした思いを持つことなしに、それぞれの法に誤った確信を得てしまっており、それは

異なるものを断じ、特に上位乘に誤った信解を起こし、小乗藏、波羅蜜と順に断じ、真言に關しても、下位の三タントラを断じてしまうことになる。深く関連している、重く異熟する謗法という大いなる業障を次第に積んでしまうのである。その典拠は後ほど示しておこう。

以上のことから、優れた主に依ること、どのように一切の教説がひとりの人が成仏するための仏縁となるのか、このことに確固とした確信をもつことは、現在実践中の事項を今後とも実践することであり、直接従事したり廃止し出来てなくても、自分が従事できていないことを理由に、断じてしまうのではなく、それらの事項に直接従事したり廃止しつつ、いつか実践することが可能となる日がくると思ひ、そのための因として資糧を積集し、罪障を浄化し、請願を立てなければならぬ。そのことにより長い時を経ることなく、意識の力は次第に強くなり、それらの一切が実践できるようにもなるのである。善知識トンバ・リンポチエのお言葉にも「すべての教説が四方の道から辿り着くとご存知の方が私のラマである」と説かれており、この言葉の意図をよく検討することが極めて重要である。しかるに本教説は、經典とタントラの枢要のその一切を、ひとりの人が成仏する道へと集約させて導くものであり、これは一切の教説を矛盾なく理解しているという点で偉大性を有している。

乙二 すべての教説が教説として顯現する偉大性

概して、解脱を求める者にとって、暫定的・最終的な利樂のすべてを実現するための方便、これは勝者の教説そのものしかない。何故ならば、取捨すべき事項のそのすべてを教示する時に、迷乱を残らず離れることが可能なのはただ仏のみであるからである。

同様に『宝性論』（第五章「三偈」）では、

勝者よりはるかに賢い者などこの世間にひとりもない。

一切智は最勝義のすべてを如実に知るが他はそうではない

仙人ご自身が説かれたこの経の部を迷乱してはならない

牟尼の法規を壊して法を損なってしまうからなのである

と説かれている。

とはいえ、量を備えた密意の注釈や勝れた方々の教誡を持つことなしに、後代の所化たちが自力で仏語に向きあつてその密意を得ることなどはできないので、大馬車たちは密意を注釈した論書や教誡を著されているのである。しかるにもしも清浄な教誡ならば、それは偉大なる典籍に確信を与えるものでなければならぬのであり、いくら多くの教誡を学ぼうとも、それらが仏の言葉とその解釈に確信をもたすことができなかったり、そこに説かれるものと逆の道を示すものであれば捨て去るべきものに過ぎないのである。

如何なる大聖典であらうとも、それらには実践の要点はなく、単なる説明である法であると見做すことで、実践するための要点となる核心を教示したものである口訣が、これらとは別途存在する、と考えてしまうのである。そして正法には説明のための法と実践のための法という異なったふたつのものがある、と捉えてしまうのである。しかしながら、これこそが無垢な經典やタントラ、そしてそれらを注釈する無垢なる論書に対する崇敬の念への妨げとなる。それらに内面的な意味は示されておらず、単なる表面上の理解に過ぎないものである、と過小評価してしまうのは謗法の業障を積むことなのだとならなければならないのである。

このように、解脱を求めんとする者にとって、欺かない最勝な教誡、それは偉大な典籍そのものな

のである。しかも自らの心が弱いということを理由に、勝れた教誡をその典籍だけで確信出来ないからこそ、勝者の口訣に基づき、それらに対する確信を探索せねばならない、と思い、その思いから口訣を求めなければならないのである。そうではなく、諸々の典籍は外面的な解釈に過ぎず、そこに要点はなく口訣こそが内面的な意味を示すのでより勝れていると捉えるべきではない。

偉大なる瑜伽行者チャンチュプ・リンチェンのお言葉にも「教誡の内面に至るということは小冊子を手にするだけで確信を得ることを指しているのではない。そうではなく、一切の教説を教誡として理解することを指している。」とある。また大ジョウオの弟子ゴンバ・リンチェン・ラマも「アティシャの教誡には、一座において〔聞思により〕身・口・意が微塵に碎ける〔る精進がはじまった〕ことで、〔その痕跡として〕いま〔經典と論書の〕すべての典籍が教誡として聞こえることがあった」と説かれており、このように理解しなければならない。

トンバ・リンボチェのお言葉でも「たとえ多くの法を学習しても、もしも法を行ずる仕方をそれ以外のとほろに探さなければならぬなら、それは間違っている」と説かれるように、長く多くの法を学習しても法を行ずる仕方を全く知ることなく、法を行じようと思ったときに、何らかの別のものを探さなければならぬなら、前述のように理解してないのであり、間違っている。

ここで〔仏陀の〕教示とは『俱舍論』で

釈尊の説かれた正法には二種ある

それは聖教と証解とを本質とする

と説かれる通り、聖教と証解の二つの教示以外には有り得ない。聖言教とは、法の実践次第たる成就

法を確定することであり、証解教とは、確定した後にそこで確定した通りに成就していることである。したがって、その両者は因・果となるのである。たとえば、馬を走らせる時、先に馬に走っていく場所を示し、示した後にそこへ向かうのと同様である。ある方向を示しておきながら、そのことは異なる方向へ走るのなら、笑いものになってしまうが、それと同様に、聞思によって何らかのあるものを確定しておいて、成就するときにはそれとは異なる他のものを成就しようとするのが、一体どうしてどうして適切だと言えようか。このように『修習次第後編』でも

また聞・思の所成が証解したその同じものを修習することから生じる慧によって修習しなければならぬのであつて、それ以外のものではない。馬を走らせる時に方向を示してから走るのと同様である。

と説かれるのである。

以上のように、この教誡は、善知識への師事より止観にいたるまで、教説とその密意の註釈書における道の枢要をすべて揃えて集約し、それらすべての場合において、止住の修習をすべきものについては止住修習をし、観察修習をすべきものについては、妙観察智によつて観察するといった実践の次第として編んで「仏地へ」と導くことにより、一切の教説が教誡として明らかにすることである。

このようではなく、道の本体を全うすることなく、特定の部分にだけ、妙観察智を離れそこだけを実践するならば、偉大なる聖典は教誡としては顕現しただけではなく、これらは外面的なものに過ぎないと思う謗法となるのである。偉大なる聖典で語られていることのその大部分は妙観察智によつて分析する必要があるものばかりであり、もしも実践するための機を失ってしまったては、これが最勝

なる教誡であると考え、確定が一体どうして起こるだろうか。もしこれは最勝な教誡でないのだとしてしまえば、これらを著した方々よりも勝れた教誡を授けてくれる者など誰がいるのだろうか。こうして甚深広大なる經典とその密意の註釈書たる偉大なる諸々の転籍が、難なく教誡として顕現し、それらは教誡のなかでも最勝のものであると捉える確定が起こり、これらは教誡ではなく、法はその裏側にのみ有るとする誤った分別を残し、無く退けることになる。

乙三 勝者の密意を容易に見出し得る偉大性

教説やその密意を註釈する偉大な聖典とは、教誡のなかで最勝なるものである。しかしそれを完全に学んでない初学者は、殊勝なる人々の口伝に依らなければ、たとえこれに従事しても密意を得ることは不可能であろう。たとえ得ても非常に長い時間、大変な苦勞に依存している。師の口訣これとこのようなものに依れば、容易に理解できるようになる。この教誡は、仏語と論書に対する確定を容易に与えることになるのであり、それがどのようなことなのかについては、随時詳しく示していこう。

乙四 大きな悪行は自ずから消滅するという偉大性

『妙法蓮華經』や『真実話者章』で説かれる通り、仏陀の御言葉のその一切は直接的もしくは間接的に仏となるための方便を説示するものであると理解しないで、成仏の方便もあるが、成仏の障げとなるものもあると捉え、「方便として」善きもの・悪しきもの、正しいもの・正しくないもの、大乘・小乗と区別してしまい、菩薩はこちらは学ばねばならないが、こちらは学ばずともよい、といって捨ててしまう対象として捉えてしまうのなら、法を断じてしまうことになる。『攝一切細破經』で、

文殊師利よ 正法を断じる業障は微細である。

文殊師利よ 誰であれ、如来が説かれたそのお言葉を、あるものは良いと想い、またあるものは悪しきものと思うこと、これは謗法である。謗法を為すものは、法を断じるので、如来を損滅するのであり、僧侶を悪しきものと語る。

こちらは正しいが、こちらは正しくない、そう語ることも謗法である。

こちらは菩薩たちのために説かれたものであり、こちらは声聞たちのために説かれたものであり、そう語るのなら、それは謗法である。

こちらは独覺たちのために説かれたものである、そう語るのなら、それは謗法である。こちらは菩薩たちの所学ではない、そう語るのなら、それは謗法である。

と説かれている。謗法を為すならば、その過犯は極めて重いことは『三昧王經』で、

この闍浮提で 仏塔を破壊する者よりも

經を断じる行為を為す者は 罪は圧倒的に深い

恒河沙数の阿羅漢を殺すよりも断經の罪ははるかに大きい

と説かれている。

概して謗法の門は極めて多くあるように思われるが、ここに挙げたこの形式こそが最悪であると思われるので、努めて断たなければならぬ。しかも先述のような確定を見出すだけで、退けることになるので、悪行は自ずから消滅する。このことについての確定は、「真実話者章」や『法華經』に多

く見受けられるので、そこに求めるべきであり、謗法の他の門は、『攝一切細破経』により知らねばならない。

甲三 聞法・説法の作法

二つの偉大性を備えた法に対する聞法・説法をどのようにすべきか、ということには三つある。すなわち聞法作法、説法作法、後に共通してなすべき作法。

乙初 聞法作法

聞法作法には三つ。聞法の功德を思う、法と説法者への奉仕法、聞法作法そのもの。

丙初 聞法の功德を思う

『聴聞頌』には次のように説かれる。

聴聞によつて諸法は理解される

聴聞によつて罪障は退けられる（戒学処）

聴聞によつて非義は断じられる（定学処）

聴聞によつて涅槃は獲得される（慧学処）

とあり、また

すっぱり闇に包まれた家に入るなら
物があり眼があろうともそれを見れないだろう
人はどんな良き種に生まれ知性を持っても
善悪の法を聞くことがなければ分からない
眼があれば灯で物を見れるように
善悪の法も聴聞で分かるようになる

また『本生蔓』でも、

聴聞によつて 心は信心へと変わる
善を歎びとし 堅固なものとなる
智慧を起こし 無知はなくなる
自らの肉にさえ値するものとなる
聴聞とは無知の闇を取り除く燈明である
どんな盗人でも奪えない最高の宝
どんな無知の敵でも負かす武器
方規を教えてくれる最高の友
貧しき時も変わらない親友
癒えぬ重病を癒してくれる薬
悪しき大軍を打ち破ってくれる最強の援軍

名声や誉れや財宝の最勝なる蔵

気高く出会った最高の人物

群れのなか賢者を喜ばせる

とあるし、また

聞法に従って実践に核心を得ている者

生の砦から容易に脱出するのである

と説かれているが、このように聞法の功德に、心の底から信解を起こすのである。

また仏が降臨するということも極めて稀有なことであり、法もまた同様であるので、貴重なものである。「宝である」と想うのである（寶想）。生来の知性を忽ちに広大にするものであるから「眼である」と想う（眼想）のである。智慧の眼が与えられるとそれにより如実に如量のものが見えるので、「明るい」と想う（明想）のである。最終的には涅槃と大菩提という果を与えるものであるから「功德は大きい」と想う、（大果勝功德想）のである。またいまこの時から止観の樂を得させてくれるものであるので「罪障に巻き込まれないもの」と想う（作無罪大適悦想）のである。以上お五つの想念を以って聴聞すべきであると『菩薩地』で説かれているがこのように思うことが、聴聞の功德に想いを寄せるということである。

丙二 法と説法者に対する奉仕作法

『地藏經』では次のように説かれている。

ひたむきな信心と敬意で聞法すべきである
仏法を語る彼を咎めたり誹謗すべきでない
法を語るものを供養すべきであることは
仏と同じく彼への思いを寄せるべきである

仏陀と同じような者であると考え、獅子座などで奉仕し、所有物を供養し、不敬を断じなければならぬ。『菩薩地』でも

煩惱を持つことなく、説法者に対して五処に心に向けぬようすべきである。

と説かれている通りに聴聞しなくてはならない。

「煩惱を持たないということにも二つあるが、そのうち」傲慢さを離れるということは、「説法者が快適に忙しくないので好ましい」時に聴聞し、「礼拝をするなど」奉仕をし、「按摩や足を洗うなどの」表敬をなし（師の仕事を引き受けることを）嫌がることなく、「師の言葉通りに」聴聞に従って実践し、「批判するなどの」諍いを求めないという六つのことを通じて聞法することである。「第二の」不遜な態度を取らないことは、法と説法者に対して敬意を払い、不遜な態度を取らないということである。「五処に心に向けぬようすべき」ということは、戒律が損なわれていたり、種族が劣っていること、顔が悪いこと、言葉遣いが

悪いこと、言葉が乱暴で聞き心地が悪く話していることで「これは聞かない」という思いを捨てる。
『本生蔓』にはまた、

正しく低い場所に座を置きなさい

〔自らの感官を〕律しているという誉れを想いなさい

歓喜を浮かべた眼で〔説法者のことを〕見なさい

〔法を説く〕ことばの甘露水を飲ませてもらうように

〔不放逸に〕敬って心を一つにして頂礼しなさい

〔心を喜ばせて〕公平で〔悪しき動機の〕垢を捨てた心をもちなさい

あたかも患える者が 医者のことばを聴くように

〔実践しようという意識で説法者に対する〕奉仕の心で仏法を聞きなさい

と説かれている。

丙三 聞法作法そのもの

聞法作法そのものには、二つある。器の三つの過失を断じる・六想に依止する。

丁初 器の三つの過失を断じる

たとえば器が伏せて置いてある。あるいは口を上にな置かれているが中が汚れている。または、汚れてないが底に穴が空いている。こうした器には、いくら神々たちが雨を降らせたとしても、その中に

水が満ちることもなく、たとえば水が満ちたしても中は清潔でなく汚れており水を飲むという目的を果たせない。中が汚れていなかっとしても、中に水が満ちること無く漏れてしまう。

これと同じように、説法の法苑にいても、充分に耳を傾けない、あるいはまた傾けても誤解し誤った動機に固執してしまうこともある。こうした過失がなかったとしても、聞法の時に、言葉と意味に確定ができずにすぐに忘れてしまったりする。こうした過失があるならば、聞法することがそれほど大きな必要性のないものとなってしまう。それ故にそれらを回避しなければならない。

これら三つの対治については経典で

善く、完全に聴聞し、心に留めなさい

などという三句で説かれている。『菩薩地』にも、すべてを理解しようという思い、集中力、話に耳を傾けること、注意を払うこと、あらゆる思いによって考える、という〔五相を通じて〕聴聞するよう

に説かれている通りである。

丁二 六想に依止する

戊初 自らを患者の如く想う

『入菩薩行論』では次のように説かれている。

たとえばどんな小さな病にかかろうとも

医者のことばを追従しなければならない
貪欲などといった多くの症状をもたらず

慢性的な病いについては言うまでもない（第二章五四偈）

われわれは非常に長い時間、癒されることなき強烈な苦しみを引き起こす病、すなわち貪りなどの煩惱で如何なる時も常に病みつづけている。それゆえまず、それ（煩惱）がそれ（病氣）であるとならねばならない。これはカルマパのお言葉にも「意味を理解してなければ、そのような修習は転倒となる。三毒素よりなる大いなる病に罹っている重病を私たちは患っていることに全く気づいていない」と説かれる。

戊二 説法者を医者のおく想う

たとえば黄疸でひどく患っていれば、名医を探さなくてはならない。名医に出逢うことができれば大いなる歓喜を生じ、何を言われようと耳を傾け、彼に奉仕しようとする。これと同様に説法をしてくれる善知識を求めなければならぬ。

もしそのような人物に出逢うことができたならば、決して重荷に考えることなく、榮譽であると思ひ、彼が語ることのすべてをその通り実践しようとし、敬意をもって奉仕すべきである。何故ならば『宝徳蔵般若経』では、

それ故、〔無上正等覺たる〕勝菩提を探さねばならず、強い意思を持つ〔菩薩たる〕賢者は、〔自分自

身の「慢心を克服しなくてはならない。病人の集団は、「自分たちの病の」治療のための医師につかないといけないように、くじけることなく善知識に師事しなくてはならない。

と説かれているからである。

戊三 教法とは薬であると想う

患者が医者が処方してくれた薬を大事にするように、説法師が語ってくれた教法は大切なものだと考え、さまざまな努力によってそれを大切にし、忘れてしまったりして無駄にしまうこともないようにする。

戊四 努めて実践することが治療であると想う

患者は医者によって処方された薬を服用しないと治らない、そう思い薬を服用するだろう。これと同様に、説法師が説いた教誡はそれを実践しなければ貪等を克服できることはない、こう考えつつ、それを実践することに励むべきである。実践することもなく、ただひたすら何度も様々な言葉だけを蒐集したとしても、術はないのである。

腐りかけた手足を切断した時、一、二度薬を飲んでも何も変わらない。同様に、我々は無始以来、雑染の悪性腫瘍を患っているであり、ここで教誡の意味を一、二度実践しただけで充分ではないのである。道のすべての肢分を究竟しようとし、そのために妙観察知によって分析しなければならないのであり、しかも河の流れのように、継続した実践が必要である。大阿闍梨チャンドラゴーミン

は『懺悔讃』でも次のように説かれている。

「輪廻する者は輪廻という」ここでも「無始以来、現在にいたるまで」常に「為すべきこととやめるべきことを思うための」心は痴によつて惑わされている。この病は「極めて」永く患つてきたものであり、「少々実践したのでは効果はなく、すべての道を誤りなく長期間努力し実践しなくてはならない。それはちょうど」膿んだ朽ちた手足を切り放した時に、薬を数錠飲んでどうなるというのか。

このように、先ずは、自らを患者と同様であると想うことが極めて重要である。このように想っているのなら、他のもの（三つの想念）も起くる。もしもこれは単に言葉だけで、雑染を取り除こうとして教誡の意味を実践しないのなら、ただ単に聞き流しているに過ぎない。それは医師を探し出し、処方された薬も飲まずに、ただひたすらに処方薬ばかり集めている患者が治癒することはないのと同様である。このことは『三昧王経』でも、

たとえばある人が病に臥し、身体が苦しく、長い年月の間治らない。

彼は病に久しく悶えているから治癒するために医師を探すこととなる。

彼は繰り返し探し求め、その果てに、賢い知識のある医師を見出す。

その医師は慈愛の心で診療し「これを飲みなさい」と薬を処方する。

多くの妙薬が処方されても治療のために服用しないなら、病が治癒することはない。

これは医師の責任でもなく薬が効かない訳でもない。ただ患者自身に過失がある。

同様にこの教説へと分離し能力を備え、禪定や■〔信などの〕根をすべてを理解したとする。しかしそれを修習し現証する努力を怠り実践しない者、彼がどうして涅槃するだろう。

私がどんなに如何なる完全な妙法を説いても、汝が聞いて、それを正しく実践しないのなら、それは病人が薬のバッグを背負って歩いているが、自分の病が治らないのに等しい。

と説かれている。また『入菩薩行論』でも、

身体でこれらを実践すべきである

言葉だけ語るとも一体何を成し遂げようか

処方箋をただひたすら読むだけで

治療にどんな効能があるだろう。

と説かれるからである。したがって「実践に励み、病から治癒しようという想いを起こさねばならない」という場合、「励む」ということは、善知識によって教えられた取捨すべきものを実践することであり、その行のために理解が必要であり、そのためには聴聞が必要となるので、聴聞し理解しなければならぬのも実践のためであり、聴聞した内容を各自の能力に応じてその都度実践することが重

要なのである。これはまた『聴聞頌』で、

どんなに多くを聴聞しようとも 戒を守ることをしなければ
その彼は戒を理由に卑下される 彼の聴聞は円満とはならない

たとえ聴聞は少なくとも 戒で善く律しているのなら

彼は戒を理由に賞賛される 彼の聴聞は円満となるだろう

聴聞することも少なく 戒律もよく守らない者

彼は両方を理由に卑下される 彼の振る舞いは円満ではない

多くのことを聴聞し 戒律をきちんと守っている者

彼は両方を理由に賞賛される それ故その振舞いは円満となる

と説かれており、また、

善説を聴聞し、しっかりと理解し、禪定もきちんと知っている。

しかし放逸して粗暴に振舞っていれば、聴聞や理解も大した意味もない。

聖者が説かれた法を飲みとし、その通りに行動と言動を行なっている。

彼らは忍辱をもつ友を愛し、感官を律し、聴聞と理解の到彼岸を実現する。

と説かれている。また『勸増上意樂』では、

わたしは行を怠ってきた 果たしていまはどうしたらよいだろう
愚かなものは死を迎える この時に嘆きと悲しみに暮れている

この悲しみは深く苦悩は堪え難い

物語りに耽溺したその結果がこれなのだ

わたしは芝居をみる群衆にいた

そして他人の演技を褒めたに過ぎなかった

私はみずから落ちぶれたままであった

物語りに耽溺したその結果がこれなのだ

砂糖黍の上っ面には何の味もない

美味というものはその内部にあったのに

表面を食べても砂糖の美味は見出すことなど出来ない。

このように物語は表皮のようなもの、意味は美味のようである。

そのようなものだからこそ、物語への耽溺を断ちなさい。

常に不放逸に常に行じなさい。言葉の意味することを思いなさい。

と説かれているのである。

戊五 如来に対して勝れた人であると思う

如来を勝れた人であると想念を持つことは、説法者に世尊を追想し、敬意を起こすことである。

戊六 法規が永住するよう思う

このように法を聴聞することで、勝者の教説がこの世間に永住すればよいと思う。

説法や聞法の時、自分の心相続とは別のものであるとし、法はまた別ものとして説いてしまうのなら、何を説いたとしても実質を伴うことはない。

しかるに、自らの心相続上に確定することを目的として聴聞する必要がある。たとえば顔に煤の汚れがついているかどうかを調べようとする時に、鏡を見ることから、それを知り、汚れを拭う必要があるように、自分自身の行に問題があるときには、聞法の時、法の鏡へと映し出されるのであり、自分自身の心相続はこんな状況になってしまったと悲壮感を覚え、これから先は、こうした欠点を取り除いて功德を成就していくことに従事しようと思い、このことから法に準ずるものを身に付けなければならぬ、と考えるようになる。『本生譚』では、

私の悪しき行いのこの姿は

法という鏡にはつきりと現れる

それを見て悲しい気持ちになり

それ以降私は法へと向かって行く

と説かれている。サウダサの子がチャンドラ王子に説法の請願をした時、彼の菩薩は彼が思う所のものは、法の器となったことを理解し説法したが、これとも同様なのである。

以上、私は一切有情を利益するために仏位を得なければならない、それを得るために、その因を学ぶべきであり、そのためには知らねばならず、そのためには聴聞しなければならない、こう思うことで仏法を聴聞しなければならない、という心を起こすのである。聞法の功德を想起し、心を奮い立たせて、器の過失を断つなどして聞法しなければならないのである。

乙二 説法作法

説法作法には四つがある。丙初 説法の功德を思う、丙二 説法者と法に奉仕する、丙三思量・加行による説法作法、丙四 説法すべき対象とすべきでない対象の違い。

丙初 説法の功徳を思ふ

報酬や名声等の物質的享受を顧みることなく、法を説くことは極めて功徳が高い。これについて『勸発増上意樂』で次のように説かれている。

弥勒よ、二十が財をとまなわぬ法施であり、何かを得たり、報酬を望まないで、法施を施そうとするというこのことが、その功徳である。

二十とは何か、といえば、「聞所成の慧たる」念を具えて、「勝義三昧という修所成の慧で決択する」智を具えて、「世俗後得という修所成の慧で決択する」知を具えて、「智慧は進化して確定する了義見によって動揺しない」堅実性を具え、「資糧道・加行道に属する世間の」智慧を具えることになり、「見道・修道に属する」出世間の智に準じた証解〔を獲得すること〕となり、貪欲は弱体化して、瞋恚は弱体化して、痴癡は弱体化して、魔は彼に取り憑く事も出来なくなり、仏世尊たちが〔一人息子のように愛し〕密意するものとなり、「十方の守護神などの善なる方面を喜ぶ人々」非人たちが彼を〔異品から〕護ることとなり、「梵天や帝釈天などの」神々によつて威厳あるものと見做される事となり、「財を省みるのではないから」友好的ではない者たちが彼に取り憑くこともなくなり、彼と交わる友たちと別れることはなくなり、言葉は重みのあるものとなり、彼は恐れるものがないこと境地を得て、快適なことが多くなり、賢者によつて称賛されるようになり、この法施は、彼らを追念しなくてはならない者とするだろう。

様々な多くの經典で説かれる功徳に心の底から信解を起こさなければならぬ。ここで「堅実性を具え」という箇所『学処集成』の新訳では「信解を具え」と翻訳され、古訳諸本では「精進を備

え」とも翻訳されている。

丙二 説法者と所説の法への奉仕

世尊が般若經をお説きになられる時、ご自身で法座を準備なされたという行状が示しているように、法とは諸仏にも奉仕すべき福田であるが故、法に対し深く敬意を払わなければならないのであり、説法師に対しても、彼らがもつ功德やその恩恵を追想し、畏敬の念を起こす必要がある。

丙三 思量・加行による説法作法

思量は『海慧菩薩所問經』所説の五想を行じる必要がある。すなわち、自分自身は医師であり、法は処方薬であり、聞法者は患者で、如来は勝れた人物であり、その法矩が永住するように、この五想を起こす必要がある。聴衆に対して慈の修習をし、他者の方がよいのかもかもしれないという嫉妬から起こる気の迷い、ますますではなくまた別の機会に延期したいという懈怠心、何度も説明しなくてはいけない労力に対する嫌悪感、自己を過大に評価して他者の謝りを指摘しようという思い、法を勿体ぶり衣食等の物質的報酬を得たいという欲望、こうした考えのそのすべてをやめて、自他ともに仏位を得るという目的で説法し、その福德こそ自らの樂の糧となると思わなければならない。

加行は、沐浴をして、清潔な衣を着用し、清らかで心地のよい場に座を詠える。次に、退魔の真言を誦誦し、それにより聴衆から百由旬までの距離の魔や魔天が侵入しないようにし、もし侵入したとしても厄障を為せなくする。このことは『海慧菩薩所問經』で説かれるのでその真言を誦誦する必要がある。さらに顔の表情も明るくし、意味を確定するためにその都度ごとに様々な喩話や論証因、聖言を引用しながら説法しなくてはならない。『法華經』でも、

彼の賢者は常に嫉妬することなどない
様々な意味をもつ愛らしい物語を語る

彼は延期しようという懈怠をよく断じており
また面倒だという気持ちも起こすことはない

賢者はすべての不快感を捨てて

慈愛の力で聴衆をも修すべきである

昼夜を問うことなく勝法を正修し

千万の喩えを語るのである

聴衆には満足感と歓喜を与える

彼はすこしも欲望も持つことはない

御馳走や軽食や飲物すらも求めはしない

着物や寝場所や法衣すらも求めはしない

病を癒すための薬すらも望むこともない

聴衆に何かを乞うことなど決してないだろう

そのようなものではなく賢者はただ自らと
これの有情たちが成仏することを願っている

衆生済度のために世間に法を語るのである
その徳楽も他者が利用すべきものと回向する

と説かれている。

丙四 説法すべき対象・説法すべきでない対象

説法すべき対象と説法すべきではない対象の差異は次のようなものである。『律経』では「請われないのに為すべきではない。」と説かれるが、ここにあるように請われてもないのに説法すべきではない。もしも請われていても、器を検討しなければならず、器であることが分かれば請われなくても説法してよい。このことは『三昧王経』で、

もしあなたに請願する者がいれば、先ずは「私ごときは詳しい大した話しはできません。」
そういわなくてはならないのである。

そしてあなたは「あなたが既にご存知のことと思います。私のごとき者があなたのような大徳の御前で 一体何をお話しできると言えましょうか。」と言うべきである。

焦って好き勝手に語るべきではない。まずは器なのか否かを充分に見極めるべきだろう。器だと分かるなら、請われなくとも話してよい。

と説かれている。また『律経』では、

立ったまま座っている者に説法すべきでない。臥した者にも説法すべきでない。低座から高座へ説法すべきでない。良いもの悪いものもまた同様である。先に歩く者に後から説法すべきではない。道を歩く者に路傍から説法すべきではない。衣で頭を覆っていたり、裾を捲っていたり、肩に羽織っていたり、腕を胸の前で組んでいたり、背中で組んでいる者に説法すべきではない。頭に髻を結っている者、帽子や冠を被っている者、額飾をつけた者、頭巾をつけた者に説法すべきではない。象や馬、駕籠や輿に乗っている者にも説法すべきではない。履物を脱いでいない者にも説法すべきではない。手に杖・傘・武器・劔・盾を持っている者、甲冑をつけている者に説法すべきではない。

と説かれている。これらと逆の者には説いてよいがそうでない者に関して述べている。

乙三 聞法者と説法者との両者が終時にどのようにすべきか

両者は終わる時にどうすべきかといえば、説法や聞法によって起こった諸善を暫定的・最終的な願処へと強い意志で廻向しなければならない。このような作法で説法・聞法するのなら、たとえ一度の法座でも、ここで述べてきた功德が必ず起こるだろう。説法・聞法が実質を伴ったものとなることで、法や説法者への不敬といった業障は、過去に積集してきたものはすべてが浄化されるのであり、たとえ新たに積んでしまおうとしても、それは増大しないものとなる。

説法・聞法の次第を有意義なものとするには、説かれている教誡は心相続にとって役に立つことと為す、とこのように考えることであり、過去の賢者たちのすべてこのこと繰り返し説いており、特に本教誡の先師たちもこのことを何度も強調されており、それこそが偉大な教誡であると思われる。しかしながら、このことに対する確信を見出すことができないで、様々に思いを巡らせて、どれだけ甚深広大な法が説かれようとも、天が魔に成り下がり、法そのものが雑染を補助するものとなってしまうことも大変多く見られるのである。

それゆえに「初日に間違ったものが十五日までは」と謂われるように、聞法・説法を道へと転化するというこの作法に対して、公平な知性を持つ者は励み、それにより、説法・聞法の機会がどれだけあろうとも、最低限でもひとつでも具えるようにしなければならない。何故ならば、教誡を説くための最高の前行こそが、これであるからである。これらのことは詳しくは文章も長くなる恐れがあるので、大切なことだけをここにまとめたが、詳しくは他のものから知るべきである。

以上で教誡に関する序分の解説を竟えた。

甲四 教誡が弟子を引導する次第

第四の教誡が弟子を引導する次第には二。道の根幹たる善知識に対する師事作法、師事後、如何に意識を修練するのか。

乙初 道の根幹たる善知識に対する師事作法

初に二。意を決するための解釈の展開・運用法を簡略に示す

丙初 意を決するための解釈の展開

『内実確定集』に「〔大乘〕住種姓者は、勝れた善知識に師事する」とある。また『ドルボ編ポトワの教え』（『青冊』）では「すべての口訣をまとめたとき、そのはじまりとなるものが、すぐれた善知識を捨てないということである。」と説かれている。

このように弟子にとって、心相統へ〔善知識に対する敬意より二無我の証解に至るまでの〕ある種の功德が生

み出され、「善知識に対する不敬より二我への相執に至るまでの」ある種の過失がなくなる、すべての樂善の源となるのはすぐれた善知識である。それ故、まず彼に対する師事作法というものが大切なこととなる。何故ならば、『菩薩藏經』でも、

要するに一切の菩薩行を得て、それを究竟し、同様に波羅蜜・地・忍・定・神通・総持・無畏・廻向・請願・仏の〔因果業の〕一切法を得てそれを完成させることは師に依存するのであるから、師こそが根たるものであり、師から生じるのであり、師は生じる拠り所であり、成長の拠り所であり、師によって起こり、師によって増大し、師に依存しており、師は因たるものである。

と説かれるからである。ポトワのお言葉では、

解脱を実現するために師以上に重要なものはない。今生の為すべきことを顧みて、それをするだけでも充分であるが指導者をもたねばそれすら叶わない。悪趣から来たばかりの衆生がこれから行ったこともない場所へと向かおうとしても師がいなくてどうしてできるだろうか。

と説かれる。しかるに善知識への師事作法には六つ。師事対象たる善知識の条件・師事する弟子の条件・師事の作法・師事の功德・師事しないことの過失・それらのまとめ。

丁初 師事対象たる善知識の条件

一般に、教説と註釈では三乗の各々に関する様々な師が説かれるが、ここでは三士道次第に則り仏道大乘へと引導する善知識のことを説明しよう。これについて『大乘莊嚴經論』では、

善知識とは よく律しており 寂靜で 寂滅している者である

その功德は勝っており 勤勉で 聖教に富んでいる

実義を証解しているものであり 話も巧みである

慈しみがあり 勞を厭わぬ者であり 彼に師事すべきである (XII, k.10)

と説かれている。これは、十法を具えた善知識に師事すべきことを説いている。これはまた、自ら律してなければ他者を律することなどできないことを説いている。それ故、他者を律そうとする師とは、先、自分自身の心相続を律している者でなければならぬ。そして、どのように律しているのか、といえ、ある特定の事柄を成就し、その各々の証解の功德を具えているだけでは無意味であるから、勝者の教説のその全体に通底するものに準じた心相続の調御法を具えていなければならないのである。これは即ち、三学処という宝以外ではないことは確実であるから「よく律しており」等と三つが説かれているのである。そのうち、先ず「よく律している」とは戒学処のことであり、これは『別解脱經』で、

常に勤めて過ごさねばならない

心という律し難いこの馬を律す

鋭く尖った百針の銜のようなもの

別解脱とはまさにこのようなものである

と説かれる。『律分別』においても、

調教されていないものを調教する銜がこれである。

と説かれているように、暴れ狂った馬を調教する人は、それなりの銜を使って手なづけなければならないように、感官が誤った方向へと向かってしまい、ちょうど暴れ狂った馬が行ってはならない方向に向かってしまう時には、適宜罰し、常時、行くべき方向へと務めて向かわせるようにしなければならないが、これと同じようなことを実現する戒学処によって心という馬を調教するのである。

「寂靜で」とは、これら善行・悪行への進退を、正知・正念をもちいて、心の内側には寂靜な状態（止）が起こっている定学処を生じていることを意味している。

「寂滅している」とは、心を自在に活動できる止に基づいた実義を妙觀察する慧（觀）の学処が生じていることを意味している。

こうした三学処により心相続を調御している、という証解の功德だけのみを持っているだけで充分であるということではなく、更に聖言の功德をも備えていなければならない。それ故に「聖教に富んでおり」と説かれているのであり、三藏等の多くのものを聴聞している人であることが求められてい

る。善知識トンパの御言葉にもまた、

大乘の師というものは、その者が話をしているときには時に無限の興が生じるのであり、その教えを実践しようとする時には、説かれたその直後から意味があり役に立つものであり、直接的な効果がもたらされるような語り手である必要がある。

と説かれている。

「実義を証解し」というのは慧の勝学処のことであり、諸法無我の証解あるいは実義の現証を中心とするものであり、それを具えている者でなかったとしても、少なくとも、聖教・正理による証解を持つている者でいなければならない、と説かれている。

また、こうした聖言教・証解教を具えた者であったとしても、もしも弟子よりも劣った者であったり、同等な者に過ぎない者であるのなら相応しくないので「功德が勝っている」者でなくてはならない。これについては『親友集』でも、

劣った者に師事するのなら堕落するだろう

同程度の者に師事しても凡庸なままである

尊い者に師事するのなら正しいことを得られる

しかるに自分よりも尊い者に師事すべきである

戒律を備えており 寂静であり 智慧がより勝れ 最高位たる者

このようなより尊い彼に師事するのなら 彼よりも尊い者になることもできる

と説かれているからである。

ブチュンワも「尊者たちの生き様を耳にして、彼らを手鑑として見習うべきである」と説いており、またターシも「私はラデン僧院の長老たちを手鑑とした」と説いているが、このようにより尊い功德をもち見習うべき者である必要がある。

以上の六法が〔善知識が〕自身が既に得ていなければならない功德である。

これ以外の残りのものは他者が想起する功德であり、次のように説かれている。

牟尼たちは 罪を水で洗い流してくれない

彼らの手は 衆生の苦を取り除いてもくれない

彼らの覚りは 他の人へと与えることなどできない

ただ法性の真実を説くことによってのみ解脱させる

ここにあるように〔善知識とは〕他者に道を正しく説き示し摂取する以外に、罪を水で洗い流す等のことができるわけではない。これには四法がある。「話が巧みである」ということは、どのように指導したらよいか、という次第に通じており、意図する内容を所化の意識へともたらすことができるよう話すことができる、ということである。「慈しみのある」は、説法の動機が清浄で、財産や名誉などを考慮することなく、慈悲によつて動機づけられ説法していることである。ポトワの言葉でチェンガに語られたものに「リモの倅よ、どれだけ説法してもよい。しかし、私はたった一度たりとも自分のためにしたことなどないのである。果たして無力でない衆生等どこにも居ないじゃないか。」とあるように、こうしたものでなくてはならない。「勤勉で」とは、他を利用することを確実に歎びとし

ている者であるということである。「労を厭わぬ者」とは、何度も繰り返し説明することを厭がらずに、説法という労力を耐え忍ぶことができることである。

ボトワのお言葉ではまた

三つの学処、実義の証解、慈愛というこの五つこそがより尊い。私の阿闍梨シャンツンは、すべてを多く聴聞なされた方ではなかった。労を忍ばれる方でもなかった。だからかこそ、彼が恩着せがましく語ることもなかった。しかし彼はこの五つを具え、そのことで彼の御前へ参じた者は誰でも意味があった。ニェントンの場合も、彼は決して話すのが得意な方ではなかったし、ひとつひとつの功德を説明するときにも、これはいますぐにはきつと伝わらないだろうな、としか思えなかったのである。しかし、彼もまた、この五つを具えておられ、それ故にこそ、彼の側にいた誰にとっても有意義であった。

と説かれている。

このようなことから、学処等の実践に励もうともせず、単に賛辞や長所が語られることを自己の生活手段とする者は、善知識としては相応しくない者である。何故ならば、たとえば梅檀の功德を述べたことを生活手段とする者に、梅檀を探す人に「君にはそれはあるのかね」と聞かれても「私はそれはもっているわけではない」と答えるしかないのと同様であり、実際に所有しないが、ただそれについて語るだけだからである。これは『三昧王経』でも、

後世の比丘のなかには

律義を持たぬ者が多くなる

彼らは多くを聴聞したと語ってはいる

しかし律や讃を評判のためにしている

彼らが戒を求めようとすることはないのである

と説かれる通りである。禪定・智慧・解脱の三つについても同趣旨のことが説かれている。

ある人々は語る。「梅檀とはこのようなものである。

線香の形もこうすると好い。」彼は梅檀の長所を語ってはいる。

しかしそこにある人がやってくる。彼が礼賛するその梅檀の香りを少し嗅いでみたいと言う。

また別の人がやってきて聞くのである。

しかし彼は同じことを繰返し語るだけである。このようにして彼は生活の糧を得ている。彼は線香のもつ功德を語るが、そんな線香を自分にはないと語るのである。

同様に瑜伽行へと勤めることもなく、ただひたすら戒律を礼賛し、それによって生活をしている者、後の世にはこうした人が登場する。しかし彼らが所詮、律をもつこともない者たちなのである。

と説かれ、残りの三つについても同じように説かれるからである。

このように解脱を実現してくれる師は、究極の希望の根幹であるので、師事したいと思う者が、これらのことを知り、条件を具えている師を探し求めることに励ませなければならぬのであり、弟子た

る師事しようとする者もまた、これらを理解して、これらの条件を備えることに励まなくてはならないのである。

時代の状況により、こうした功德のすべてを揃えた者を得るのが困難な場合もあるから、そういった者が得られない場合にどうすればよいかといえば『妙臂所問経』では、

車輪がば片方しかない場合

馬がいても馬車は道を進めない

実践の助けをしてくれる者がいなければ

衆生が悉地を得ることはできなくなる

その人には知性があり

姿は美しく清らかで

種姓は出家者であり

法流に従っている者

心意気があり勇んで感官を律している

やさしい口調で語り施しをする慈悲がある

飢えや渴きや執着してしまうのに耐えており

婆羅門や外教の神々を供養することもない

聡明で記憶力も良く行動力がある人もいる
三宝に信心を持つ友である

こうした功德をすべて備えたものは

この鬭諍の時代には得難い

しかるに功德の四分の三や八分の五がある者は

賞賛される友として依るべきである

と善友には、すべての条件を全うしているものを八分の五が最低条件であると説かれているのであり、これは師についても同じであるとジョウオは説かれた、と『ドルポ編ポトワの教え』で説明されるので、条件として説かれるすべての八分の一で、難易度がもっとも低いものをひとつでも全うしていることが最低条件となる。

丁二 師事する弟子の条件

帰依する弟子とは『四百論』で次のように説かれる。

公正で 知性があり 求道心のある

この聞者を「器」と呼ぶのである

説法者の長所が別になることはない

これは聴聞者の場合もまた同様である

この三法を具えた者が聴聞の器量として相應しい者である。もしもこの三つを具えているのなら、説法者の長所が長所として現れ、短所として現れない。それだけでなく、聴聞者の長所も彼に対し長所として現れ、短所として現れることはない。もしこれらの特質を具えていないなら、説法者たる善知識がいくら清浄な者であっても、聴聞者に過失によって、過失有る者となってしまう、説法者の欠点すらも長所として捉えてしまうことになる、と『四百論』註で説かれる。それ故に、すべての条件を備えた善知識を得ている場合でも、彼がその者であると特定し難いことから、その者であると特定するために「弟子の方でも」こうした条件を具えている必要があるのである。

ここで「公正さ」といつているのは、主義主張に陥っていないことである。もし主義主張に陥っているのなら、それが障害となり、功德を見出せないことになり、その結果、善説が意味していることを見出せなくなるだろう。これについて『中観心論』では

主義主張に陥って心を塞いでいれば

決して寂靜を証することなどない。

と説いているがその通りなのである。主義・主張に陥っていると、自己の教義に捉われ、他人の教義のことを嫌悪することである。「初学者の大部分は、前世の修習の力で主義主張を好悪すること

好む傾向にあるので」 こうしたことが自分自身の心相統に起こっているのかどうかを検証して、それを廃止しなくてはならない。『菩薩別解脱』でも

自分勝手な主張をやめ、戒師や阿闍梨の流儀に正しく住して、彼を敬わなければならない。

と説かれるからである。

それではただこれ（公平さ）だけでよいのかと云えば、そうではない。たとえ公正であっても、もし善説正道と悪説邪道の二つを弁別できる知性をもたなければ、器としては不適切であるので、しかるにその二つを理解するための知性が必要である。

それでは、このただこの二つがあればよいのかといえ、これもまたそうではない。たとえこの二つがあったとしても、図示された法を聞くの如くになっていては、器としては不当で、「求道心」を具えている必要がある。『四百論』註では、仏法・説法者に対する強い敬意とそれを判断する力の二つを合わせ合計五つが説かれている。同様にこのように法を求めんとする気持ち、聞法に際しての配慮、法と説法者に対する強い敬意、悪説を捨て善説を採る、という四つが有る。この四つの順縁は「知性を有すること」であり、逆縁を捨てることが「公正さ」である。

師が指導可能なこうした諸法のすべてを具えているのかを顧みて、「いま現在自分がそれを」具えていれば悦びとして、具えていないならば、後々具わるための因に勤めなければならないので、所依たるこうした法を知り、条件を理解しなければ、分析したり考察することは始まらないので、大いなる目的から逸れてしまうだろう。

丁三 師事作法

弟子はどのように師事すべきか。これらの器を具えた者は、前述の条件を師が具えているかを検討する必要がある、もしも条件を具えた者であるならば、その者から法恩を授かるべきである。

これに関して、ゲシェー・トンパとサンプワの二人には異なる行状が伝えられている。サンプワは多くのラマ、すなわち法を説く限りの者から聴聞し、カムからの道中で、ある優婆塞が法を説きつつ、それを聴聞しながらやってきたとされる。周りの人々がそれはさすがに行儀が悪いだろうと言ったところ「君らはそんな風に言うべきでない。それでも私には二つ利することがあったのである。」と語られたといわれている。これに対し、ゲシェー・トンパは師は少なく五人しかいなかった。ポトワとガンボ・リンチェン・ラマの二人は、このどちらがよいのかを議論され、「意識を未だ浄化できていないうちは、欠点が見えてしまい、不信任を起こしてしまうので、その間は、ゲシェー・トンパのやり方がより善いだろう」と同意して、以後そうすべきであると説かれている。このことは極めて尤もなことであると思われるので、そのようにすべきである。

こうした法恩を授け、特に正等寛の教誡によって意識を善導してくれる、この善知識に対する師事作法には二ある。思量による師事作法（戊初）、加行による師事作法（戊二）。

戊初 思量による師事作法

初に三。師事の思の概説、特にその根となる信心の修練、恩を追念し恭敬する作法。

己初 師事の思の概説

『華嚴經』では九種の心で善知識に師事し恭敬することが説かれている。それは師事する思いを総括しているものであるが、それを要約すると四種類の心情となるのである。

まずは、自分勝手をやめるようにし、自ら師に仕える堅実な息子であると思う。堅実な息子は放蕩することもなく、父の顔を窺い奉行するのであり、その言葉通りに実践する者であるが、このように師の顔を窺わなければならない。このことは『現在仏現前三昧』（般舟三昧經）にも、

彼はすべての場合に自己の放蕩をやめ、善知識の意向に従うべきである。

と説かれているのである。あくまでもこれは「善知識の」条件を具えた者に対してであって、どんな者でも常にその顔を窺い、鼻を向ける訳ではない、とも説かれている。

〔第二の〕敬愛の気持ちをどんな者によっても離反しない確固としたものとする、ということが、「堅く決して壊れてしまうことがない」金剛の如き心である。それは魔物や悪友等によっても「師弟関係が」離反することがない。このことについては『同經』では

愛する者は無常であり、親しき顔も無常である、というのを断じる。

と説かれている。

〔第三の〕師の重責のすべてを負おうとする、ということが、大地の如き心である。それはどんなに重たい荷を背負ってもそのすべてが決して疲れることを知らない、ということである。ポトワはチェ

ンガの僧侶たちに「あなたは私の善知識たるこのような菩薩を出会い、そのお言葉通りに実践しているが、これは大いなる功德である。いまこのことを重荷とせず荘厳としなさい。」と語られたようなことである。

〔第四の〕責務を担う方法としては六〔心〕がある。

〔第一心〕鐵輪圍山のような心とは、如何なる苦しみが生じようとも、すべての場合に揺らがないうことである。チェンガワはルクパに滞在されていた時、ゴンパ・ヨンテン・バルは強く寒がり体が弱わり、ジョウオ・シヨンスタクに対し、去るべきか留まるべきかを相談したところ「いまもし安楽に座臥できる〔帝釈天の〕尊勝宮を住居としていても、何としても大乘善知識に師事し聞法する経験は今回限りだとするだろう。だからこそ、しばらくは留まるべきである。」と説かれたのと同様である。

〔第二心〕世間の侍従のような心とは、一切の悪行のすべてを実行する時でさえ動揺することなく実行する、ということである。ツアン地方で翻訳官やバンディットがいた場所で土砂の崩落が起こった時、トンパは衣を脱ぎ、濡れた土砂を撤去し、どこからともなく乾いた白い真砂土を敷き、ジョウオの前で曼荼羅を成就なされたので、ジョウオ御前は「嗚呼、汝のようなものがインドにもいるだろうか」とおっしゃられたようなことである。

〔第三心〕掃除夫のような心とは、慢心や高慢なすべての思いを断ち切って、自らは師より身分も低いと捉えることである。ゲシェー・トンパのお言葉にも「我慢の丘には功德の泉が湧くことはない」と説かれ、またチェンガのお言葉にも「植え付け春に新緑は山頂の高いところからもたらされるのか、谷の低い土地からもたらされるのか、と考えるべきである」と説かれている通りなのである。

〔第四心〕運搬車のような心とは、師の所行がどのようにに困難な重い荷物であって、それを進んで引き受ける、ということである。

〔第五心〕犬のような心とは、師により罵られ謗られてそれを怒りとしないうことである。ゲシェー・ラソにトールンパは会うたびに叱られていたところ、ラソの弟子ニャクモパが「この阿闍梨は我ら弟子を嫌っているんだ」というと「きみには怒っている言葉のように聞こえたのか。こうして私にこの者が会うたびにヘールカが加持するようなことが起こっているのだ。」と語られたが、これと同様である。『八千頌』でも

もし説法者たちが求法の徒を罵り見向きもしないことがあろうとも、汝は反抗せず、だからこそ一層法を求め、敬意を起こし疎んじず随行すべきである。

と説かれている。

〔第六心〕船のような心とは、師の所行がどこに向かうとも、その通り往来し疲弊しないことである。

己二 特にその根となる信心の修練

根本である信心の修練とは次のようなものである。『宝灯明経』では、

信心は先行し母の如く産み出す

一切の功德を護持させ増大させる

疑問点を払拭し暴流から解脱させる

信心は妙善の都城への標識である

信心は汚れをなくし心を清める

我慢を断じ敬意を払わせる根である

信心は最勝なる宝石や埋蔵や足となる

手のように善を集める根となるものである

と説かれている。また『十法経』では

出離へと導くものである

信心とは最勝の乗り物である

それゆえに智慧のある人は

信に則して師に仕えねばならない

不信という不善があるのなら

白き諸法が生じることはない

種子を火で焦がしてしまえば

芽に先だつものが何故あろうか

と説かれており、肯定遍充・否定遍充により信心が一切の功德の基であると説かれている。

ジョウオにトンパが「チベットでは修習や成就しようとする者は沢山おりますが、殊勝な功德を得た者はいません。」と申し上げたところ、ジョウオ御前は「大乘の功德は大なり小なり、そのすべてが師匠に依存して生じる。君たち、チベットでは、師のことを凡俗な者であると想っているだけでは

ないだろうか。それ以上でなければ、一体どうして生じることがあるだろう。」と語られたのである。

またジョウオに「アティン様、どうか教誡をお願いします」と大声で請願する者がいたときには「はっはっは。私には耳はちゃんとある。」「教誡というものは信仰なんだ。信……。信……。」「

と語られたように、信とは極めて重要である。それには、一般に三宝に対するもの、業果に対するものの、四諦に関するもの、という信にも多くのものがあるがここでは師に対する信のことである。

それでは師を弟子はどのように仰いだらよいだろうか。『金剛手灌頂タントラ』では、

秘密王よ、阿闍梨を弟子はどのように仰いだらよいのか、といえば、仏世尊と同じようにすべきなのである。彼の心がそのようなものであれば、常に善が生じるし、彼は一切世間を利益する者である仏となるだろう。

と説かれ、大乘經典でも釈尊であるとの想いを起こす必要が説かれ、律でも同様に説かれている。

これらが意味することは、どのように仏であるのか、ということを知っている時、そこに欠点を見出そうという考えは起こらないのであり、功德を思う心が起こるのである。これと同様に、師に対して意識的に欠点を数えてしまうすべてのものを放棄して、功德を数える意識を修練する、ということなのである。しかもこれは同タントラで、

阿闍梨のもつ功德を捉えなさい

欠点を決して捉えてはいけない

功德を捉えれば悉地を得るだろう

欠点を捉えれば悉地は得ないだろう

と説かれるように為さなければならぬことなのである。

このように、師は功徳が顕著であるにも関わらず、その人の欠点が僅かでもあり、その側面から考えてしまえば、それは自分にとっても悉地の障害となってしまう。たとえ欠点の方が顕著であろうとも、その欠点の側から考えずに功徳の側から見る信仰を培うことで、自分にも悉地が生じる因となる。しかるに、自分の師である限り、彼に大なり小なりどんな過失があろうともその側面から考え、欠点を思う感情が起るとき、その感情を意識的に廃止しなくてはならない。もし放逸や煩惱が増大する等の趨勢で、欠点を数えてしまっても、懺悔自戒に努める必要がある。そうすれば次第にその趨勢は弱小化してゆくのである。また戒、多聞、信心等の功徳を多くをもつ者に対して、意識的にその側面を捉えて、功徳を思わなくてはならない。こうしたことを修習すれば、たとえ僅かな小さな欠点が見えるとも、意識が功徳の側面を捉えていることで、信仰を妨げるものとはならないのである。

自分が望んでいない方向に、たとえどんなに多くの功徳があるのが見えていても、欠点が見えてくる意識が強いなら、そのことで功徳が見える意識が圧倒される。また、自分に欠点が多くなると多く見えても、自身の多少の功徳を見る意識が強すぎるのなら、そのことで欠点を省みる意識が圧倒されてしまう。こうしたことと同様なことなのである。

ジョウオ・チェンポの見解は中観であったが、セルリンパの見解は唯識形象真実派をとり、思想的観点からは優劣があったけれど、大乘道次第の全体、菩提心といったこれらは彼に師事して得たものである。諸師のなかでも比類なき方と考えておられたのである。これも同様なことである。

功徳の側面を想い、欠点の側面から数えるべきでないことは、破戒等に関しても、たとえ一偈頌で

も聴聞していれば、それ以降特例なく為さなければならない。『宝雲經』では

師事することによって善は増大するのであり、不善は隠れてゆく。このことを理解することから、戒師の聞法の多少、理解・不理解、持戒・破戒、といったものに関わらず、釈尊であるとの想念を起こす。釈尊をこそ歎びとし信じるように、戒師をも信じ歎びとすべきである。阿闍梨などには敬語をつかい、奉仕する、これはそれに基づいて未だ究竟してない菩提を究竟することであり、未だ断じてない雑染を断じることとなる。こう歎喜し、悦びを見出すことで善法に従うものが享受できるのであり、不善を享受しなくなるのである。

と説かれており、『勇猛所問經』によれば、

家主よ、もし菩薩が聖教を与えてくれ、口誦を追求することから、布施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧を有する、即ち菩薩道の資糧を積集することを含む四聯以上の偈頌を、誰かから聞いたり、口伝を授かったり、与えてもらおうとしよう。その時には、その阿闍梨に対し、それを与えてくれた彼からの法であるということによって、彼を尊敬しなければならぬ。どのような名句文の偈頌であつたとしても、それが説かれたその劫の限りは、その阿闍梨を裏切ることなく、物質的にも精神的にも、そしてすべての供物をもって奉仕し帰敬しなければならぬ。

家主よ、また阿闍梨を阿闍梨であると尊敬しなければならぬ。こうしたことすら全うできないのなら、非法の敬意を払うことは言うまでもないのである。

と説かれているからである。

